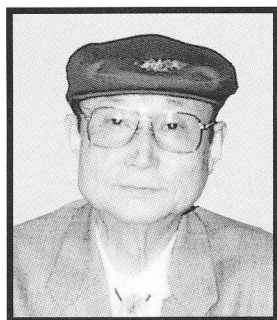


岡本 清君を偲んで

昭和19年卒 牧 野 鐵 五 郎



同志社中学航空部在学中、
国体京都代表として滑空競技に出場。
大学時代に2級滑空士取得。
特別操縦見習士官として入隊。
白城子陸軍飛行学校卒業、
挺進飛行第2戦隊を経て、
飛行第90戦隊へ。終戦で復員。

三興電気(株) 営業開発部長
日電工業(株) 常務取締役

平成12年10月4日 病没
ご遺族 岡本 昌子 様

平成13年の年賀状の準備をしているところへ、突然！岡本君の訃報が飛びこんできました。

エエ！？あの岡本君が！？一瞬私は絶句した。その少し前に頂いたお手紙には

『ご心配を掛けたけれど、退院してきたから、どうぞ、ご安心を』

とあっただけに、驚きは一層強く、私の頭の中には在りし日の岡本君の姿が映画のひと駒、ひと駒のように次々と思い出されてきた。

岡本君は中学時代からグライダーに情熱を燃やし、すでに中学在学中に3級滑空士の免許を取得、同志社に入学と同時に航空部に入部、飛行機の操縦には目もくれず、グライダーの操縦一筋に進み同志社航空部では数少ない“生ッ粋”のグライダーマンの1人だった。そして盾津飛行場ではソアラによる飛行機曳航も行い、生駒山山上にあった滑空場から盾津の飛行場までのソアリングの楽しみも満喫する腕前であった。

戦時中はアメリカ大陸爆撃の操縦予定者としての訓練を受けたり、終戦後は中国空軍の教育を担当するという数奇の運命も経験されたと聞く。

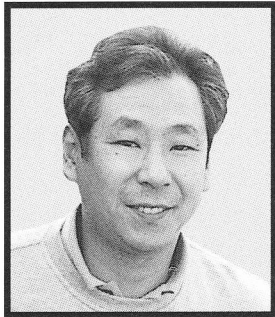
その岡本君の一番の切ない思い出は、最後に入院した際に、病院の窓を横切って飛ぶ八尾飛行場から飛び立った飛行機の姿を病床から眺めるのを一番の楽しみにしていたと言う奥様の話に、つい私も貰い泣きをさせられたことである。

そんな最後まで空を愛し続けた“男”、そして同志社航空部の歴史の生き証人が、また1人、雲の彼方に去っていった。

心から岡本君のご冥福をお祈り致します。

どうぞ、安らかにお眠り下さい。

河井 登君を偲んで



平成12年 8月8日病没
ご遺族 河井 淳子 様

昭和53年卒 土肥(木沢)稔治

平成12年の8月初旬のある夜、私が東京出張から帰るなり、家内は「お帰り」の挨拶もそこそこに「足立さんから電話がありましたよ。急いでいる様子でしたよ」という。久しぶりに家内から聞いた「足立さん」の名前に、懐かしさから着替えもそこそこに電話した。

「久しぶり、しばらく会っていないけど元気か？懐かしいな」

「おう。久しぶり、元気にしてるよ。……突然やけど……河井が亡くなったそうや」

「えっ……河井って、あの河井か？」

2人の会話が一瞬途絶えた。余りにも突然で理解することができない言葉が受話器から聞こえてきたからだ。

「えっ……冗談やろ？……最近は会う機会がなくて、年賀状だけの付き合いになってたけれど、元気になっていると書いてあったけど」……

河井君の亡くなった知らせはあまりにも突然だった。

河井君と足立君と私は、同じ学年で航空部に入部した仲間であらまで残った3人である。卒業以来、仕事の忙しさから、最近はあまり会うことができなかったけれども、同じ釜の飯を食い、同じ夢を追い、青春を駆け抜けた、忘れることのできない仲間である。電話を切ってから、しばらく呆然としていた私であつたが、あの青春の日々が、

走馬灯のように浮かんできた。

河井君、吉井川の合宿はきつかったな。朝早くたたき起こされ、ランウェーまではランニング、フライトが始まると、翼端を取り、全速でリトリブ。出発点に戻った時には翼にしがみついている状態だ。特に、H23Cのテールは重かった。その合間に、パンと牛乳の朝食をとる。喉を通るはずもなく無理に流し込んだ。機体が出発したら、次のリトリブのためにランウェーを歩きながら愚痴を言い合つたことも懐かしい。夏は悲惨だった。交代で昼食を取るのだが、私はお茶でご飯を流し込む以外に方法はなかったが、君は平然とご飯を食べていたのを思い出す。君は明るく頑張り屋だった。合宿が終わると、もうこんなしんどいことは勘弁してほしいと、みんなで口をそろえて言い合うのだが、1ヶ月もすると「また飛びたいな」と最初に言ったのはいつも君だった。

こうしてどんどん空を飛ぶ魅力に惹かれていったものだった。

もう君とはこんな昔話をすることはできない。本当にさびしい。最愛の奥さんと、4人の子どもたちを残して旅立つのはさぞつらかつたことだろう。私たちは、君との思い出は絶対に忘れない。安らかに休んでほしい。

合掌